

## 英語コミュニケーションにおける異文化理解

吉 田 一 衛

(1996年1月24日受理)

### I 異文化の存在

大学での後期試験で、アメリカ人講師のB氏は、英会話のテストを始める前に、さらさらと次のような英文を板書した。

I want to say thank you very much for last year. I really enjoyed it. I hope you have a good vacation. Please relax and do your best! Don't forget the front and back of the test!

教室という場では、日本人の大学教師には、容易に浮かんでこない文句である。出だしの文である“I want to say thank you very much for last year.”など口にするだけでできないであろう。さらに、“I really enjoyed it.”とくると、小憎らしくなる。その上、春休みは楽しくときている。そのくせ試験は頑張ると言うことを忘れない。最後に、答案用紙は裏まであるのでお忘れなくと注意する。

日本の大学では、教師が中心で権威的である。したがって、教えてやっているという意識が、まだ強いように思われる。これに対して、板書した文章から、アメリカ人教師は学生を対等に見ていることがよくわかる。アメリカに一定期間滞在していると、“thank you”がアメリカ人の口から頻繁に発せられ、日本語の「ありがとう」より広い意味で使われているのを実感する。そのような意味機能をもっているとしても、1年間の講義の終りに、このような表現が学生に対して自然に出てくることに会うと、日本とアメリカの生活習慣なり文化の違いを意識せざるをえなくなる。

典型的なアメリカ人について、陣崎(1967:62-3)は次のように述べている。「彼は個人の尊厳を重んじ、権力をきらい、平等と機会均等を主張する。独立不依の精神を持ち、勇気があり、機敏で、率直で、らい落で気易く、幾分誇張を好むがユーモアもあり、だれからも愛されるパーソナリティを持っている」。たしかに、機敏で、率直にこのような文書を板書するとは、B氏は典型的なアメリカ人である。B氏の発想はヨコ会社のものである。日本人の発想はタテ社会のそれであると言われている。日本の教育の場における教師の権威的な態度にその一端を見る。

国立大学の大学院生のKさんは、福岡市の英会話学院に、毎週、夜2回通っている。数人の受講生の中に、60歳を越えて間もない、ある企業の社長さんが来ているとのことである。この人物が英会話で英語を使い始めると、他の若い受講生は遠慮して、英語をしゃべる時間を自然とゆずることになる。その理由は彼が年配者であるからといった。これは年令差という日本のタテ社会の特徴を表わしている。アメリカの場合、これほど遠慮することは

ないようである。アメリカでは、再教育のため数多くの年配者が講義に出席していること  
もあろうが、やはりヨコ社会の特徴が影響を与えていると考えてよいだろう。だからと  
いって年配者に敬意を表わしていないというわけではない。タテ社会が悪いとか、ヨコ社  
会が良いとは、いちがいにいわれないが、これらを基盤とした、文化の違いが現われてい  
ることに興味をひく。

文化の違いが高じると精神的問題を引き起こしかねない。これがカルチャーショックと  
いわれるものである。成瀬 (1979: 184), ファーカス, 河野 (1987: 221-8) によると, カル  
チャーショックは, 異なる外国の文化による強制的な価値観や生活習慣が, 強く神経に障  
る現象である。また, 自己の文化と非常に異なる文化との間にある衝撃でもある。カル  
チャーショックにかかると, 欲求不満, 心配, 絶望感などが生じることになる。いうなれ  
ば, 自分にとって, まったく異なる文化的刺激に出会って, 多様な新しい経験を誤解する  
ことに対する感情的な反動である。こうした反動を軽減するには, 異文化理解が, まず必  
要になる。本論では, 英語教育における異文化理解の現状, 文化, 幾種類かの異文化の特  
徴, 異文化理解の意義と目的について考察する。

## II 英語教育における異文化理解の現状

国と言語が異なれば, その文化も異なる。文化が異なれば, 言語によるコミュニケー  
ションの障害が現われる。それどころか, 国と国の紛争を引き起こしかねない。英語の文  
化と日本語の文化を比較研究することによって, それぞれの特質を明らかにする必要があ  
る。英語教育においては, 日本語の比較による対照言語学で, 日本語と英語の相違の研究  
がなされてきた。その結果, 日本語の言語構造の比較において顕著な成果がみられた。し  
かし, 文化については十分に研究されたとはいえない。異文化の研究手法としてはいくつ  
かあるが, 文化人類学の手法を採用するのも一つの方法であろう。ことに, 英語の教材と  
教授法への適用が考えられる。従来, 英語の構造だけにしか目を向けなかった英語教師の  
見方を広げる可能性をもっている。

英語を理解し使用するとすれば, その背景となる文化を理解しなければならない。言語  
は社会的集団により規定されているからである。したがって, 日本語対英語は, 日本文化  
対英語文化ということになる。ただ, 英語は国際語として一般に認められている。そうで  
あれば, 単に日本語対英語は, 日本の文化対イギリスとアメリカの文化比較に限るのは望  
ましくない。日本文化だけでなく, 中国や韓国などの同一文化圏についても考察を加える  
ことが望ましい。

このような現状把握から, 英語教育において, 異文化理解の必要性が, 口にされるよう  
になってから久しい。文化についての教材は, 今日のように国と国の交流が盛んになるに  
つれ, 以前よりも多く教科書に採用されるようになってきた (井上 1982: 36, 真尾 1987:  
52)。たとえば, 主要なある教科書の次の編集方針の中に, このことがよく現われている。

「英語は今日では, 実質上国際語としての地位を占め, 広く国際理解と国際交流のための  
欠くことのできない伝達手段となっている。もちろん言語は文化の担い手であるから, 英  
語の学習で英語国民の文化を無視することはできないが, 国際語としての英語の役割を考  
慮して題材は, 英語文化に限らず広く世界的, 国際的視野から選ぶようにした」(藤田

1986: 44)。

国際語としての英語という視点から、その文化も欧米の文化にかたよるのではなく、多様な文化に触れるような方向へとむかっており、英語教師もこのことを強く望んでいる（井上 1982: 37, 佐野 1989: 8)。

### Ⅲ 文化とは

異文化について考えるとき、まず、「文化」とは何かということを考えてみなければなるまい。文化の定義は、物の考え方や見方によりいろんな定義がなされよう。それだけに多くの定義がある。広く考えて、文化人類学の視点から見ると、ある民族の共有するもの、その民族の生き方、生活様式を指すことになる（井上 1987: 36)。ある民族の信仰、伝統、習慣、生活様式などの総合されて現われたもので、その民族の独自性ともいえる（真尾 1987: 44)。ここでは、文化をある特定の人々の行動が受け入れられ、パターン化したものと定義することにしよう。したがって、文化はその社会の共通理解の総体ということになる。思考、感情、行動についての社会集団の方法の総体であり、機構または配列でもある。さらに、社会集団のつくり出すもの——衣服、家屋、道具、器具など——で表わされる物理的現象も含んでいる。すべての民族は文化をもっている。文化なしでは個人は生活できない。このことから、異文化とは、民族の生活習慣、信仰、伝統といった社会集団の方法の総体における違いということになる。

文化を別の視点からみると、文化には目に見えるものと、見えないものがある。それぞれ「表層文化」「深層文化」、*“small-c”* *“Large-C”* *“formal culture”* *“deep culture”* の用語で区別されてきた（吉田: 1991)。佐野（1989: 7) は Robinson の定義を引用して、*behaviorist/function* と *cognitive/symbolic* の2種類に区別している。前者は文化の行動そのもの、あるいは行動の所産とされるもので、生活様式、社会習慣などが含まれる。後者は特定の社会集団を構成する成員の共通した考え方や価値観が含まれる。文化の行動的特徴は、学生にとって容易に理解しやすいが、認知的文化特徴は、教師の説明によらないと理解困難なものである。鈴木（1976a: 15-6) は、「あらわな文化」(*overt culture*)、「かくれた文化」(*covert culture*)と呼んでいる。「あらわな文化」は目につきやすく、具体的な現象に限られている。これに対し「かくれた文化」は、目に見えなくて、なかなか気付にくい文化の側面である。本人が自覚していない、無数の細かい、目に見えない習慣の形から、文化は成り立っているので把握しにくい。しかし、この「かくれた文化」の側面に気付くことこそが、異文化理解の鍵であると鈴木は述べている。いずれにしろ、文化はこのような2面性を備えているということになる。

このような文化の受けとめ方に立つと、文化はそれぞれの国で異なる可能性をもっている。文化が異なる所に焦点を合わせることにより、それぞれの文化の特色を明らかにすることが可能である。このような相違を知ることにより、異文化間の言語理解も可能となる。ただ、異なる文化の中に住んでいる人は、異なる前提により場面を見ようとする。人は、自分自身の知覚によって物を見る習慣を身につけている。しかし、その習慣が学習されたものだという事実を見失いがちである。たとえば、一人のアメリカ人女性が、アフリカ人女性に魔天楼の絵はがきを見せたところ、アフリカ人女性は「何て美しい庭でしょう」と答

えた。アフリカ人女性は、自分達の住む丸木小屋以上に高い建物を見たことがないのだから、角ばったコンクリートの建物の絵を見ても庭としか受けとれないのである (Brown 1963: 78-9)。アフリカ人女性は、自分独自の知覚の仕方で見ただけである。

社会の共通理解の総体としての文化の中だけにいることは、自己中心的になる危険性がある。自分の住む社会のきまりが自然で正しいと思うようになると、自分と異なるきまりは間違っていると考えるようになる。こうした自己文化中心主義は、異文化間の理解を難しくする。自己文化中心主義は、文化相対主義の文化が多様であるとする見方を否定するものである。人の経験は、その人が使う言語の影響を受けるとするサピア・ウォーフの仮説に従うとするなら、異なる言語を使用する民族は、同じ物を見たとしても違った見方をすると認識する。したがって、異文化理解にはこの見方が必要となる (秦 1983: 65-6)。

#### IV 文化の比較

それぞれの民族は、それぞれの文化をもっている。英語学習について考えてみると、英語を使用する国民の生活は、英語教師の理解できない歴史的課程をへて形成されたものである。したがって、英語教師は自分の経験をもとに、英語国民の文化を解釈しようとする。このことから英語文化の誤解が生じる。こうした文化の相違を年齢、愛情表現と露出度、男性と女性の地位、性に対する見方、料理についてみていくことにする。

##### 1. 年 令

東洋では、誕生日は大きな祝い事になっていて、10年毎の誕生日は盛大に祝う。したがって、年を隠そうとする人はあまりいない。これに対し、アメリカ人は若さを崇拜する。そのため、若く見えるように努力する。たとえば、アメリカでは、かなり年配の夫人は、原色に近い派手な服装をする。逆に、若い女性は地味な服装をしている。若ければ何を着ても若さにあふれ美しさがあるからだと考えられている。日本の女性の場合は、若いときには派手な服装をするが、年をとるにつれ地味な服装になる。日本とアメリカでは逆である。

年齢そのものの受けとめ方は、韓国とアメリカでかなり異なるようだ。韓国の外国語大学のP教授が、ハワイ大学をすでに退官していたかつての academic adviser になってくれた女性の老教授に、親切な指導に感謝して次のように言ったそうである (Park 1979: 66)。

I would like to extend my sincere thanks to you for the enormous help and enlightening guidance you gave us in spite of your great age.

ところが、このことばを聞いた彼女の顔が厳しくなり、口がゆがんだ。数時間後、彼女がP教授のところに来て、"in spite of your great age" という表現は、彼女を非常に老人扱いにするものだとしなめられた。これを聞いたとき、P教授は何か罪を犯したような気持ちになった。儒教思想の強い歴史をもつ韓国では、長幼の序が重んじられる。したがって、"in spite of your great age" という表現は、年長者に対する当然な敬意として

表出されたものである。

San Francisco の下町にショッピングに出かけた折に、P教授はエレベーターに乗ろうとしたとき、品の良い老紳士と出くわした。そこで、P教授は先をゆずるため“After you”というとき、老紳士もにっこりしながら、“After you”ときた。とっさに、気転をきかしたP教授は“After age”ときりかえた。すると老紳士はエレベーターに乗りながら“Do you think you are younger than me?”と冗談半分にやり返され、顔が赤くなった。これはアメリカ人が年をとっていることを、口に出していわれると心よく思わないことを示している。

韓国では、年齢について少し異なる受けとめ方をするようである。年を重ねるということは、気品、尊敬、敬愛の対象となることを意味する。他の人とコミュニケーションをしようとするときには、年齢が考慮される。日本人の場合も、会議などで年配者に発言を優先させる。話しの相手の年齢により、話し手の態度や敬語の使い方が変る。話し手よりも聞き手の年齢が高ければ、ていねいな言葉で話しかけることになる。日本語では、年上の者を「兄」と呼び、年下の者を「弟」と呼ぶ。姉妹についても同じである。英語では兄弟、姉妹をそれぞれ brother, sister で表わす。韓国語は日本語の表現に似ている。年上を“hyŏŋ” (형 elder brother) といい、年下を“dongseŋ” (동생 young brother) と呼び区別している。年齢の高低で brother を区別しているのである。メキシコでは、「兄弟」は hermano で、「兄」を hermano mayor, 「弟」を hermano menor と区別している (金山 1977: 61)。したがって、英語の brother と同じような表わし方をする。日本語も韓国語も brother に相当する語はない。

日本と韓国では、brother に相当する兄弟は自分より年上か年下でなくてはならない。ところで、アメリカでは年上の兄に対しても“Bob”とか“Tom”と呼びかける。日本と韓国ではこのようなことは起こらない。たとえば、一家に2人の娘がいるとき、妹の恵子が姉の敏子にむかって呼びかける場合、「お姉ちゃん」というが、「敏子ちゃん」とはいわない。年齢の高低によるタテの関係が支配しているからである。しかし、2人の年齢が接近している場合、このルールが守られないことはある。

日本人と韓国人は、話しかける際には、年齢が基盤になっている。初対面の人に話しかけるようなとき、日本人はまずその人の年齢を配慮して相手にふさわしい敬語を探す。このような態度の底には、人は年を重ねるにつれ賢くなるという東洋的発想があるからであろう。韓国では、こうした考えが日本より強く残っているように思われる。人は年をとるにつれ尊敬され、golden period を迎えるのであり、若いときにはできないものである。しかし、このような考えも最近韓国の都市では変わってきているのかもしれない。

## 2. 愛情表現と露出度

Brown (1963: 101-2) によると、ニューギニアの Kwoma は男性、女性ともヌードである。しかし、貞淑さには厳しい慣習が存在しているという。Kwoma の少女は額から網の袋をひざの所までさげている。この袋は物を運ぶ道具だが、外に出るときには、必ずもっていく。袋をもたないままで、男性のいるところで身をかがめたりすることはしない。娘は両足を真っすぐに伸ばし、ぴったりと揃えている。男性が、女性を見ているのを見つかけられると罰せられる。したがって、衣服をまとっている男女と同じような慣習が支配して

いることになる。

身体の露出度も国によって異なると Brown は述べている。たとえば、回教の国では、女性が頭から地面につくほどの服をすっぽりかぶっている姿が見られる。女性が見る男性は夫と、ごく近い親類の者に限られている。病気になっても、男性の医者に診てもらうのがはばかれる。これと比べて、アメリカやヨーロッパでは、女性が腰のところまで背が割れ、胸を露出させた服を着ているのを見かける。首がかくれる程の襟首の服を着る中国の女性は、欧米の首や腰を露出した女性を目にすると驚くだろう。ただ、今日の中国の変化が激しいので、上海や北京などでは驚かなくなっているかもしれない。

1950年代に、東南アジア地区担当のイギリス人総督が、2人の若い女性と手を組んでレセプションに出席する写真が、*Straits Times Annual* 誌に載り、イギリス人が騒いだことがあった(Brown: 102)。ヨーロッパやアメリカの海水浴場で見かける水着より体を隠していたのだが、胸を出していたために、読者にかなりショックを与えることになった。また、西アフリカからの民族舞踊団が、ニューヨークで公演しようとした際に、故郷でやっているようにノーブラで踊ろうとして物議をかもしることがあった。女性の露出度に対する反応は、その国の文化、物の見方、時代の変遷などにより異なる。ただ、露出度の高い国の女性が、少ないか、無い国に現われると、誤解を受けたり騒ぎを引き起こすことになる。この現象は、一つの服装パターンが、異質の服装パターンに進入するとき、文化的干渉が生じることを示している。

男女間の愛情表現についても国によって異なるようである。たとえば、韓国では、公衆の面前で、男女が手を組んだり、逢い引きをするのは、まだ一般的でないと言われている(Park: 48)。また、公衆の面前での愛情表現は馬鹿げた行為とされ、ときとして非難の対象にすらなる。日本の場合、30年前頃まではそのようであった。韓国では、非常に嬉しいこと、逆に、非常に悲しいことに出会っても、感情を表面に出すべきでないと考えられている。したがって、夫がしばらく留守をして帰って来たからといって、妻が駅や空港で夫に抱きついたり、キスをしたりしない。

多くの日本人は、アメリカ人が駅や空港で別れるときにキスするのを初めて見たとき少なからず驚いた。ところで15年前、教え子の女性が、福岡のある大きなホテルで結婚式をあげた。式の進行につれ、ウェディングケーキに2人でナイフを入れようとしていた。すると突然、司会者が「花婿さん！ 花嫁さんにキスをしてあげてください。」とマイクでいった。すると花婿はさりげなく花嫁の口唇にそっとキスをした。その途端、はっとして顔がほてるのを感じた。日本の若者もここまできたのかと感無量になったが、最近では、このような場面がごく普通になってきたようである。腰布をまいたアフリカの一夫多妻主義者は、公衆の面前で妻にキスをするアメリカ人宣教師がみだらであると考えている。このように、文化によっては、公衆の面前で、愛情を表現したり、性について話すのは、夫と妻にとってみだらなことと考えられる。韓国人は、公衆の面前でのこうした愛情表現は、みだらと考えるが、アメリカ人はそう考えていない。日本人の場合は、アメリカ人と韓国人の間に位置しているようであるが、少し韓国人に近いようにも思われる。いずれが良くて、いずれが悪いということにはならないが、英語のコミュニケーションの学習では、日本の文化の基盤に立って、このような現象を理解しようとするのではなく、英語文化の基盤に立って理解することが必要であろう。

### 3. 男性と女性の地位

日本では、妻の位置は夫の後数歩さがったところとなっている。最近では、この距離が縮まるか無くなる傾向にあるのだが。韓国も日本とかなり似ているようである。韓国では、女性が男性と並んで公衆の中を歩くのはタブーと考えられている (Park : 49)。ところで、アメリカは ladies first の国である。25年前、はじめて、ハワイの East-West Center で研究に従事していたとき、友人の Jim がわれわれ日本人の大学教師 3 人を家に招待してくれた。Jim の職業は、第 2 言語としての英語の指導主事であった。約束した時間に、彼の家に到着すると、居間に通された。すると、私たちと話相手をするのは妻の Marry であった。彼女は、丸いテーブルのまわりに置かれた椅子の一つに深々と坐り、足を前で組み、煙草をふかしながら私たちと話をはじめた。夫の Jim は、台所と居間を仕切ったカーテン越しに、私たちに話しかける。料理をつくる頃合をみては、カーテンを開けて顔を出しながら話すという具合である。焼きかけた肉が、こげそうになるとカーテンの向こうに顔を隠す。なんとなく気ぜわしく落ちつかない感じである。エプロンをして、当然といったふうに料理をつくっている。Jim も Marry も 50 に近い年であった。夫が料理をつくり、妻が平然と椅子に坐わり、客と話をするなど日本の男性には考えられないことである。この光景には、全く違和感を覚えた。ただし、最近では、若い夫妻の共稼ぎが増えたので、様子は少し変わってきたようだ。日本と韓国では夫中心であるのに対し、アメリカでは夫と妻が中心であるように思われる。

朝鮮戦争の勃発前に、一人のアメリカ人が韓国の片田舎を訪ねた。山道にさしかかったとき、一人の韓国人がロバに乗って坂道を登ってきた。見ると、その後、彼の妻があえぎながらついて来ている。この光景に驚いたアメリカ人が、「お前さんは女性の扱い方を知らないんだな？ Ladies first だよ。女性をそのように扱ふものじゃないよ」といった。すると、ロバに乗っていた男は、「こりゃ私たちの習慣ですたい。はい」と答えた。このことがあって、このアメリカ人が、朝鮮戦争の直後に、韓国を訪ねる機会があり、再度、この片田舎に出むいた。すると、今度は、山の坂道を女がロバに乗り、男がとぼとぼ後からついて歩いていた。そこで、アメリカ人は「おい、お前さんの習慣が変わったね」といった。すると、韓国人の男は、目をしょぼつかせながら、「すみません、戦争後は、女房が前に行くようになりました。なにしろ、この辺りには、地雷が埋められているようなので」と答えた (Park : 44)。この笑い話は、最近の韓国における男性と女性の地位の在り方を象徴しているように思われる。

男性の後に女性が続くというのは、今日の日本では必ずしも強く支配している習慣ではないかもしれない。それでも、アメリカに比べると、女性が男性の後にくるという習慣はまだ一般的特徴として残っているように思われる。こうした態度は、日本人の男女が公衆の面前でキスしたり、抱擁したりせず、女性が喜びと悲しみの感情を表面に現わさないことと相通ずるものがある。その行動において控え目であり受容的なのである。

アメリカ人の女性が男性と同じように、表面に行動を押し出す積極性と能動性をもっているのに比べると、日本人の女性は、控え目で、受身的で、忍従的といえそうである。もちろん、以前と比べると、その度合は変わってきたといえるだろう。和辻 (1935 : 41) は、日本人の受容的で忍従的人間性は、ヒマラヤを越えて、インドから中国や日本に入ってきたとしている。しかし、その侵入の仕方は、戦闘的、征服的でなく、受容的、忍従的であった。

これに対し、アメリカやヨーロッパの人間は、ギリシャの伝統を引いていると考えられている。ギリシャ人のいう自然との調和は、自然を人間化することである。したがって、人間が中心になる。自然からの解放は、自然との戦いによる解放を意味する。人間の競争、権力欲などによる人と人との摩擦、知識欲から生じる理性の発展、創作欲による芸術の産出、これらがすべて人間中心の積極性を生み出しているのである。アメリカ人が理性的で積極的、日本人と韓国人が感情的で受容的という説明がつきそうである。このことは、日本のアメリカに対する政治、経済、教育活動の中に多くみられることである。すなわち、自己主張をするのではなく、まず、相手の自己主張を待っているのである。

#### 4. 性に対する見方

性の解放ということが言われてきた。しかし、どの程度、性を受容したときに、性を解放したといえるのか、即断は難しい。Brown (1963: 56) によると、ある社会では、結婚前に性交渉が許されているという。また、ある地域では、bachelor house があり、そこでは若い男女が共に寝とまりすることができる。しかし、このように sex freedom を許している多くの地域では、結婚前に妊娠することは非難される。原始社会に存在する完全な性の認可は、性を享樂するというよりは厳しい規制が働いている場合が多い。自由な性の唯一の規制として、近親相姦を禁止している社会があるかと思えば、婚前交渉、婚外交渉を規制している社会がある。結婚した夫婦について期日の規制を設定しているのはよく認められることである。女性の生理期間、妊娠、授乳時の性交規制などがそうである。

一夫多妻の社会では、妻と子どもの居住方法がいくつかあるようだ。ある回教国では、妻と子どもは、家屋の公的な部屋から離れた共通の婦人の部屋に住んでいる。アフリカの一夫多妻主義は、それぞれの妻が自分自身の家を所有し、自分の穀倉をもつのが一般的だといわれている (Brown: 29)。一夫多妻のある社会では、年の若い妻は、年長の妻の指揮下にある。ところが、別の社会では、初めの妻が妻としての地位を得る。その他の女性は第二夫人となるが、これはかつての日本に存在していたものである。また、別の社会では、一人の男性が第二夫人と同じように、何人かの妻をもつ場合がある。この典型的な例として、バイブルに出てくる Jacob の2人の姉妹との結婚があげられる。Leah と Rachel の姉妹は、Jacob の第2夫人と同じように、女中としての役を果たすのである。同じような話は、1人の男性が2人の姉妹と結婚する姉妹婚 (sororal polygyny) にみられる。このときの花嫁の値段は、牛、山羊、金やいろんな贈物で支われる。Jacob の例のように、花嫁の代価は、花嫁の父親に対する労働で支払われる場合もある。

女性の地位が変化しつつある現代社会では、一夫多妻制は軽蔑されるのが一般的傾向である。しかし、女性自身一夫多妻制が普通と考えている社会があることも事実である。この場合、年長の妻は、夫に別の妻をめとるように主張する。それは、家族の地位と威信をもたせようとするためである。また、召使いがいなかったり、労働力を提供する者がいないことから、そうした仕事をしてもらうために、女性を求めるといふ妻の現実的な理由による場合である。女性が比較的孤独な生活を送っていて、夫の社会的な生活に参加できないような社会では、妻はもう1人の女性仲間を歓迎することになる。一夫多妻は比較的単純な社会で多くみられるが、社会的機構の複雑さと一夫一妻制の間に相関はみられない (Brown: 35)。複雑な社会でも、一夫多妻制と第2夫人制が存在する場合がある。逆に、単

純な社会でも、一夫一妻制がみられることがある。ごく最近まで、アメリカのモルモン教で、一夫多妻制が行われていたのはよく知られているところである。今日のアメリカで、離婚と再婚が、普通の出来事となっているが、これは連続的一夫多妻制といえないこともない。

幾人かの人間が、一つの部屋しかない家に住み、プライバシーが保てないような社会では、お互いが性的に親しくすることをさえぎる一種の心理的な距離が、人々の間に存在している。このような場合、人と人の結合が近親相姦となるときのときである。お互いが、公けに名を呼び合うことや、どんなときも2人であることが禁じられている。親密さを増すという理由で、一緒に食事することを禁じている社会は多い。たとえば、夫が死んで子どもがないとき、その寡婦を死んだ夫の兄弟、または近親者の妻とすることを義務づけたユダヤの慣習である逆縁 (lévirat) がある社会では、女性が夫の兄と食事することが禁じられている。しかし、夫の弟とは自由に交際してもかまわない。もし夫が死ぬようなことがあると、弟は彼女と結婚することになるからである。これとは逆に、一人の男性が、2人の姉妹と結婚するようになる社会では、妻の姉に対しては形式的にふるまうことが要求され、潜在的な妻である妹に対しては、自由にふるまうことが可能である (Brown: 47)。このように、男性と女性の性に対する考え方は、その社会の経済的、社会的、歴史的な条件により異なるということである。このような違いに目を向けることで、はじめて性に対する見方を適切に理解することができる。

## 5. 料理の比較

妻の母は、客を招くのが好きだったので、自ら料理に力を入れることになった。時間をかけて作った自慢の料理を客に出すときには「あまりおいしくないのですが」とか、「口に合わないかも知れませんが」という前置が必ずつく。アメリカやヨーロッパ人では、「私自慢のこの料理おいしいので食べてね」となる。この母は、イギリス人の友がわが家にとまったときにも、日本人客に対するのと同じ前置を使った。この両者の表現については、今までにもいわれてきたことであるが、日本人は、このような場合に控え目な表現を使う。こうした中に、2つの文化の違いをかいま見ることができる。

料理そのものを取り上げて、文化の相違を具体的に学習させようとしたのが Abrate (1993) である。フランス語を学習するアメリカ人学生に、フランス料理を学習対象にすることにより、フランス語そのものの理解を深めようとしたのである。それと同時にフランスの生活慣習を理解させようとした。たとえば、食事の時間に関して、アメリカ人は5時から5時半に夕食をとる。これに対し、フランス人は7時で、スペイン人は10時から11時である。日本人は6時か7時であろうか。最近は共働きの夫婦が多くなっているため、さらに遅くなっていることも考えられる。夕食のパーティでフランス人の招待主はテーブルの傍に坐る。日本人が下坐に席を取るのとよく似ている。

料理の味については、フランス料理は、アメリカの料理より薬味がきいている。塩分と甘味がアメリカの料理より少なく、ワインを使い、チーズの風味が強い。カロリーは、アメリカの料理より平均的に低い。ちなみに、フランス料理は2,200カロリーだが、アメリカ料理は2,400カロリーが普通である。アメリカ料理の方が、カロリーが高いのは、アメリカ人が砂糖と揚げ物を好むからである。

料理は他の芸術と同じように、その国の文化発見の手段でもある。胃は目と心と同じように、文化を吸収するからである。Abrate は、フランス料理とアメリカ料理を比較することで、学生に自分自身の生活習慣を批判的に検討させ、人は同じことをどこでもしているのではないことを知らせている。その上で文化的相違を認めさせ、my way が唯一のもので、唯一正しいものとはかぎらないことを受け入れさせようとしたのである。

## V 文化的意味の重要性

ある英語教育の実践家が、英文科を卒業した女性と次のような会話を交わしている。

「私は、自分自身をふり返って、つくづく学校英語に絶望しちゃっているの」

「それは何故？ 大学の事？ 中学からの事？」

「ずっとよ。中・高・大学ね。何しろ長々とやるじゃない？ それなのにその結果として現在の私みたいに、だらしがないのよ。まあ、花嫁学校のかざりなんだ、とからかわれてしまえばそれきりなんですけどね。それにしては、やたらにむつかしい英文法や、本や、何やかやと盛だくさんにしごかれたでしょう？ 才能がない、ばかなんだ、とあきらめるにしては何となく虚しいんですよね」

「ふうーん」

「一体何をやったのかしら？ と正直そう思いますよ。……小説を読めるわけでもないし、まして話を通じさせるなんて以ての外、という事は英語に関する限り、全くゼロの年月を送ったというわけね。あるのは、あーあっていう劣等感よ」(中津 1974: 61)。

このやりとりは、英語教育の効率のわるさを突いたものである。しかも、音声英語の習得における非効率性の強い批判が背景にある。英語学習における音声英語の重要性を否定するわけでないが「読む」と「書く」も同様に重要であることは否めない。「やたらにむつかしい英文法」をやったり、「小説をよめるわけでもない」とすれば、学習者の能力に合った教材を選び、英語による文化面に目を向ける必要性がありそうだ。「つくづく学校英語に絶望」させない工夫はいくつかある。その一つが、文化的側面に目を向け興味を引き出すことである。

鈴木(1976b: 80)は、人類学の視点を英語教育にもち込むことを提案している。日本人が思ってもいないような仕方で、客観的に同じと考えられる対象を、異なるように把握している種類のものが世界に沢山あることを学生に理解させることである。このことが、鈴木のように、初歩の英会話を教えるより重要だとは、必ずしも思わないが、学生の英語学習に対する興味を引き起こすことは疑いない。たとえば、“Raise the hat” はていねいな挨拶のしるしで、“Wave one’s hand.” はむしろ別れの挨拶である(小川 1974: 220)。これらの動作は、日本人にとってそのような意味を表わさないのだから、学生は本当の意味がわからないのである。

22年前、研究のためヨーロッパに出かけた際に British Airway を利用した。スチュワーデスが食後に、“Tea or coffee?” とたずねたので、“Tea.” と答えた。すると “Black or sugar.” ときた。そのとき、“Brown tea.” と口をついて出そうになった。日本語での「紅茶」は「紅」の色がついている。しかし、紅茶の実際の色は濃い茶色である。英語では sugar の入らない brown tea が black ということになる。現在ほどに sugar を入れな

いのが black ということが、まだ普及していない当時としては、「紅茶」ということに馴れていた日本人にとってこの発話は異様に感じられた。同一物を異なるようにみるという事実を理解することが、異文化を知る第一歩である。色についての表現は、文化が異なれば異なる表現をする。そのため、色の解釈についての誤解が生じる可能性だってある（吉田 1990）。

日本語では、魚に関する名前が多くあることは、すしを食べに行けばすぐにわかる。そのことは魚が日本人にとっていかに大切かを表わしている。英語では牛や豚の肉の部位を区別する名前が多い。部位でなくとも名前だけでもこまかい。英語には、日本語の「牛」に相当するものに cow（牝牛）、bull（牡牛）、ox（去勢牛）、cattle（牛の総称）、calf（子牛）がある。このように「牛」に対して、英語では異なる単語を多く使っていることは、その背後に狩猟文化があることを示している。動物文化と草食文化の違いによるものである。日本人の生活の中には、狩猟文化は稀薄であることを示している（鈴木 1976b: 73）。日本語の「牛」とそれに相当する英語の名詞の多さを示すことから、本来的に、日本人が草食文化をもち、アメリカ人やイギリス人が狩猟文化をもっていること、さらに、言語がある民族の生活環境を代表し、人間は同じ事実にあっても、言語によってこの世界の切り取り方が異なること（井上: 36）を英語教師が指導できれば、英語と日本語を表面的に置きかえる以上に、学生は英語に興味を引き起こすことになるだろう。言語と文化の関係をすることにより学習意欲を与えることができよう。このことは学生の知識欲を旨めさせることになる。知識習得の過程そのものが、英語習得の刺激にもなる。ヤコブソン（1971: 227）によれば、知識を得ようとする志向の基礎には、知識欲、すなわち、ますます新しいものを知ろうとする志向が存在している。さらに、認知的興味が安定することにより、障害を克服しようとする努力し、知的領域の困難を征服し、自主性を育てて学習の困難に打ち勝つ態度を生じる。これが英語を学習しようとする動機づけとなる。

民族により物の見方が異なることは、ラテンアメリカにおける、人種に対する見方にも現われている。たとえば、ブラジル人にとって、金持の黒人は white man であり、貧しい白人は negro とみなされている（Brown: 130）。このことは、人間の生物学的事実を完全に無視しているのではないが、経済的、文化的要素から、このような受けとめ方をしているのである。ラテンアメリカでは、同じインディアンの兄弟でも、一人が白人として、他がインディアンとして見られることがある。それは、兄弟の一人がヨーロッパの習慣に従い、ヨーロッパ人の服装をし、そのようなしゃべり方をする場合、白人とみなすのである。このような見方には、アメリカにみられるような人種差別の考えはない。このことから、どの民族が生まれつき優れているなどという優越感をもつ必要がない。

表面的に異なる文化を見つめる中に、文化の普遍性を見出すことが重要である。このような普遍性を見出すためには、英語教育では、アメリカとイギリスの文化だけでなく、いろんな国の文化を見る必要がある。この普遍性に気づかないために、他の民族を理解することができなく、善意が通じないこともある。その典型的な例は、先進国の後進国への経済援助である。その援助が、本当に活かされていないことがあることにみられる。

英語は、他国の文化や人間を知るための有力な手段になる。そうであれば、英語技能の習得を、自転車や泳ぎを習得するように、機械的で自動的的技能だとする見方には警戒を要する。Dahlstedt（1972: 333）もいうように、言語はその本質において、知的で、人間的、

文化的な発展と密接な関係にある。英語の背景にある人間行動と文化を理解しなければ、英語のコミュニケーション能力も本物にならない。communicative competence は、文法や語彙を習得するだけでは解決できないもので、英語か日本語で訳して対応する語であっても、その語についての国民の抱くイメージや意味は違うことが多い（井上 1982: 36）。

英語は国際語だといわれている。そうであるなら、アメリカとイギリスだけでなく、英語を通して非英語圏の国々の生活や文化を、英語を通して知ることが必要となる。このことが、学生の目を開き、物に対する幅広い考え方を育てることになる。英語教育の中に異文化理解をもち込むねらいもそこにある。たとえば、隣の国である韓国については、同じ文化圏にありながら意外に知られていない。大学で二つの外国語を学習するのであれば、一つは西欧語で、もう一つはアジアの言語であるのが望まれるかもしれない。世界を見ようとするには、西を見る目と東を見る目が必要とされるからである。その理由は、二つの交点に世界を正しく見る目が養われるからである。欲を言えば、アジアの言語だけでなく、中東の言語なども考えに入れる時代になったのかもしれない。

## VI 異文化理解の意義

異文化理解 (intercultural understanding) は多文化理解 (multicultural understanding) でもある。Robinson (1993: 142) によれば、多文化理解の現象は、人がある事項を多様に説明する方法をもつようになり、異なる文化のスタイルに対応する多様な相互作用を習得するときに現われると述べている。たとえば、reciprocal (相互作用的) は肯定的で、nonreciprocal は否定的であるため、アメリカ人とヨーロッパ人は、nonreciprocal なる用語に出会うと気分を悪くする (Robinson: 143)。しかし、アジア系の学生は nonreciprocal speech に対する態度は否定的ではない。その理由は、社会的立場が異ったり、男女間の会話などでは、丁寧なことばの習慣として受けとめられているからである。

会話の中で、相手のいうことに同意したり、不同意を示したりする日本人の仕組みは、アメリカ人と異なるものがみられる。日本人は“no”というのをためらう場面が多い。そのため、相手の気持ちをこわさないために、“no”といえずに招待を受け取ることになる。外山 (1995: 18) もいうように、日本人は相手のいうことを頭から否定することのできない、心やさしい人間なのかもしれない。むしろ、対立をさけたいと願うからかもしれない。このような日本人の文化的習慣では、ことばで相手に同意を示すことで、内心では同意していなくても、相手を否定することで相手の気持ちを害するよりも良しとする傾向がある。しかし、このような見方は、アメリカの見方からは否定的な評価しか受けない。

Ashworth (1991: 237) は多文化主義 (multiculturalism) を国際性 (internationalism) の第2の同義語として使っている。多文化主義の社会では、人種、宗教、信条のいかんにかかわらず、個性を伸ばす機会が保障されていなければならない。このような見方は、アメリカにおいて強く意識されていることであるが、なにもアメリカだけに適用されるのではなく、異文化理解をしようとする国であればどこにでも適用すべき見方である。

一般に、英語学習を考えると、Bex (1994: 60) がいうように、英語学習では、比較的単純化された文化の中で、コミュニケーション活動が行われるため、規範的な言語形式を使うことになる。英語そのものに限ってみても、いろんな種類の英語で表わされる言語行

動に出会ったとき、真の文化に出会うことになる。たとえば、ある教科書は、標準語を使う中産階級の若者が登場する。ガールフレンドがデートの時間に遅れたので腹を立てる。こうした場面を示すテキストは、必ずしも現実を反映していない空想的で、真空的であると Bex は批判している。また、英語でアメリカやイギリスの話し手を使うことは、Anglo-American の文化を押しつけることにもなりかねないとしている。そうすると、国際語としての英語は、アメリカとイギリスだけに限定することには問題がある。英語には、地理的、社会的、機能的要素により区別される多くの英語がある。そのような英語は、いろんなそれぞれの価値を内包したものである。したがって、特定の限定された英語を国際語とするのは適当とはいえない。

以上の考察から、異文化理解は、多文化理解を意味し、国際性を習得する国際人をめざすことでもある。小川 (1987: 204) は国際人を次のように定義している。「一つの社会の一員としてその社会を代表することができると同時に、今一つ別の社会の人の立場に立ってものを見たり考えたりすることができ、しかもその両方の社会に橋渡しする、両社会を超越した普遍的自己を持つ人間」。この小川の定義に異文化理解の意義が集約される。ただ、異文化理解での英語は、国際語としての英語を使うことになるのだが、アメリカとイギリスの英語に限定するのは問題がある。

## Ⅶ 異文化理解の目的

異文化理解の意義について、前節で考察したが、その意義を踏まえて、異文化理解の目的について考察を加えることにする。Abrate は外国語の目的を、コミュニケーション能力を効果的に習得するばかりでなく、文化の学習を通して、異文化の理解と寛容を習得することに置いている。「寛容」とは「寛大で、よく人をゆるし受け入れること。咎めだてしないこと」(『広辞苑』)である。それぞれの民族の異なる文化に接することにより、互いの価値観や考え方の相違に対する寛容さを養うのが異文化理解の目的といえる (佐野 1989: 7, 中村 1990: 100)。要するに、異なる文化をゆるし受け入れる態度を育成することが目的といえる。

Sippert-Davila (1985: 238) は、異文化理解の key word として “cosmopolitan” をあげている。この用語は、国外の企業で働こうとする者へ、交差文化 (cross-cultural) の知識を習得させるための目標の一つとしているものである。すなわち、地球的知識、広い心をもつ態度、柔軟なコミュニケーション技能、コスモポリタンの人物と適切にやっつけていく行動の習得をめざす。こうした目的を達成するため、次の3点を踏まえた異文化理解の教育を実施する。(1)自分自身の文化価値を知る。(2)目標言語の価値を知る。(3)両文化間のギャップを調べる。この教育の意味は、自分の人生、生き方について、どのように見られているか、変ってきているかを顕在化することにより、自分自身の文化をいかに越えられるかにある。このような教育は、国外の企業で働こうとする者がアメリカを出発する前に実施されているものである。その内容については、技術についての教育が、第1位にきているが、異文化理解が第2位を占め、経営的内容の教育が第3位である (Inman 1985: 250)。このことから、アメリカのこうした企業が、異文化理解をいかに重視しているかがわかる。

異文化理解が企業の中で重要な地位を占めているが、コミュニケーションにおける異文

化理解はどのように位置づけられるであろうか。Sato (1995: 33-4) は, intercultural communicative competence が multicultural education の中で習得されるべきだとしている。コミュニケーションでは, 心理文化的, 社会文化的要素により影響を受ける。その結果, 異なる文化的背景をもつ者がコミュニケーションをしようとするれば, 発信者のメッセージが誤って受信者に伝わることになる。するとコミュニケーションに障害が生じる。多文化性に焦点を合わせた授業をすることで, 異文化に対して積極的に学生がなったことを Mantle-Bromley (1991: 425) は報告している。ことに, 外国語学習の初期段階での多文化授業についての効果測定を重視している。その理由は, 初期の段階では, 学生が柔軟であるのに対して, 中・後期の外国語学習に影響を与えることができるからである。

異文化理解は多文化理解でもあるが, これをさらに発展させて, 全地球教育 (global education) へとむかう。Rosenbush (1992: 129) によると, 全地球教育の目的は地球上の有限な資源を前提にして, 民族的多様性, 文化的多様性と相互依存にもとづく知識, 技術, 態度を育成することにある。この目的実現に関連する 4 領域の knowledge, abilities, values, social principle をあげている。たとえば, アメリカでは, 白人中流階級の先入観が知識に反映されすぎているため, もっと多くの見方を反映させた信頼される正確な情報の必要性を示唆している。価値についても, 学生が価値体系間の相違を検討する機会と, 自分自身の価値体系を知る機会を提供すべきだとしている。こうした教育は早いほどよく, 10代では多くの主張と感性が, すでに固まっているので遅いといっている。

これまでに考察を加えてきたのは, 異文化理解をどのように実現させるかの方法と目的であったが, 英語学習に対する異なる文化をもつ学生が, どのような期待を教師に対してもっているかを分析したのが Mccargar (1993) である。対象となる特定の人物の行動に対する, ある人物の期待を表わすのが役割期待 (role expectation) であるが, 8カ国の留学生を対象に分析している。それによるといくつか面白い結果が明らかになっている。たとえば, 日本人留学生は, 教師の問いに対しては正しいものだけを答えるべきだと考えている。これに対し, アラブ, ペルシャ, インドネシアの留学生は反対の考えをもっている。教師の権威については, 韓国とペルシャの留学生は認めていて, 日本, インドネシア, 中国の留学生もある程度認めている。英語の学習形態について, グループによる学習では, アラブ, ペルシャの留学生は反対である。日本, 韓国, 中国, ラテンアメリカの留学生は賛成を示している。

これらのことから, 異なる文化をもつ学生は, 教師に対して異なる役割を期待していることがわかる。英語学習における役割期待の相違が, 留学生の異文化グループに存在することを表わしている。したがって, 教師は, こうした学生の期待を知り, そのような期待に合った教授法を使うことが望まれる。それぞれの異なる期待に合うようにすれば, 異なる文化の学生に適したカリキュラムと教授法で, 適切な学習ができることになるであろう。

この論文を終るにあたり, 友人の韓国外国語大学教授 Dr. Myung-Seok Park から献呈を受けた文献を使わせていただいたことに感謝する。その文献は references に示したものであるが, 韓国の異文化についての記述は, 主としてこの文献によるものである。

## References

- Abrate, Jayne (1993), "French Cuisine in the Classroom: Using Culture to Enhance Language Proficiency," *FLA*, 26, 1, Spring, 31-37.
- Ashworth, Mary (1991), "Internationalism and Our Strenuous Family," *TESOL Quarterly*, 25, 2, Summer, 231-242.
- Bex, A. R. (1994), "The Problem of Culture and English Language Teaching in Europe," *IRAL*, 32, 1, February, 57-67.
- Brown, Ina Corrine (1963), *Understanding Other Cultures*, Englewood Cliffs: Prentice-Hall.
- Dahlstedt, Karl-Hampus (1972), "Mother Tongue: A Swedish Viewpoint," *IRAL*, 10, 4, November, 333-350.
- 藤田清正 (1986) 「異文化教育について——さまざまな視点から見た中学校英語授業における異文化教育——」『中部英語教育学会紀要』Vol. 16, 42-47.
- 秦 正哲 (1983), 「異文化理解——特に Culture Shock をめぐって——」『中部英語教育学会紀要』Vol. 13, 63-72.
- Inman, Marianne (1985), "Language and Cross-Cultural Training in American Multinational Corporation," *MLJ*, 69, 3, Autumn, 247-255.
- 井上紀子 (1982), 「英語の授業で文化を教えるということ」『中部地区英語教育学会』Vol. 12, 36-42.
- ジェニファー・ファーカス, 河野守夫 (1987), 『アメリカの日本人生徒たち』東京書籍。
- 陣崎克博 (1967), 『アメリカ研究序説』英潮社。
- 金山宣夫 (1977), 『比較生活文化事典』大修館書店。
- Mantle-Bromley, Corinne and Raymond B. Miller (1991), "Effect of Multicultural Lessons on Attitudes of Students of Spanish," *MLJ*, 75, 4, Winter, 418-425.
- 真尾正博 (1987), 「題材から見た中学校英語教科書の分析——異文化理解の観点から——」『関東甲信越英語教育学会紀要』第2号, 43-53。
- Mccargar, David F. (1993), "Teacher and Student Role Expectations: Cross-Cultural Differences and Implications," *MLJ*, 77, 2, Summer, 192-207.
- Morshbach, Gisela (1981), "Cross-Cultural Comparison of Second Language Learning: The Development of Comprehension of English Structures by Japanese and German Children," *TESOL Quarterly*, 15, 2, June, 183-188.
- 中島文雄監修 (1976), 『新英語教育論』大修館書店。
- 中津燎子 (1974), 『なんで英語やるの?』牛夢館。
- 中村正之 (1990), 「我が国の国際化に伴う教育課程の改善について」『宇都宮英語教育研究会紀要』第2号, 94-112。
- 成瀬武央 (1979), 『言葉の磁界』文化評論。
- 小川芳男 (1974), 『英語の教え方・学び方』国土社。
- 小川邦彦 (1987), 「国際化社会における英語教育はいかにあるべきか」『中部英語教育学会紀要』Vol. 17, 204-210.
- Park, Myung-Seok (1979), *Communication Styles in Two Different Cultures: Korean and American*, Seoul: Han Shin Publishing.
- Rivers, Wilga M. (1993), *Interaction Language Teaching*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Robinson, Gail L. N. (1993), "Culturally Diverse Speech Style," Rivers, Wilga M. (ed.) (1993: 141-154).

- Rosenbush, Marcia H. (1992), "Is Knowledge of Cultural Diversity Enough? Global Education in the Elementary School Foreign Language Program," *FLA*, 25, 2, April, 129-136.
- 佐藤正之, 長南まり (1989), 「高校における異文化理解の指導——Team Teaching を中心にして——」『東北英語教育学会紀要』No. 11, 5-15.
- Sato, Yuji (1995), "A Way to Implement Intercultural Communication Education in English Education as a Foreign Language," *ARELE*, 6, 33-41.
- Sippert-Davila, Susan (1985), "Cross-Cultural Training for Business: A Consultant's Primer," *MLJ*, 69, 3, Autumn, 238-246.
- 外山滋比古 (1995), 『英語の発想・日本語の発想』日本放送出版協会。
- 鈴木孝夫 (1976a), 「言語人類学, 言語社会学と英語教育」『新英語教育論』63-83。
- 鈴木孝夫 (1976b), 『ことばと文化』岩波書店。
- Wildner-Basett, Mary E. (1994), "Intercultural Pragmatics and Proficiency: Polite Noises for Cultural Appropriateness," *IRAL*, 32, 1, February, 3-17.
- Yambe, Tamotsu (ed.) (1970), "Applied Linguistics and the Teacher of English," ELEC.
- ヤコブソン, ベ・エム (1974), 『人間行動のモチベーション』明治図書。
- 吉田一衛 (1991), 「英語教材における比較文化——色を中心にして——」『教育工学紀要』(福岡教育大学付属教育実践センター) 第9号, 15-23。